

OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students



プロフィール (Profile)

氏名 (Name) 炬口茜 (Takenokuchi Akane)
所属 (School) 理学系研究科生物科学専攻
学年 (Grade) M2
留学先 (Name of overseas institution) 韓国

留学期間 (study abroad period)
2017年11月17日

記入日 (Date) 2017年11月24日

留学レポート Study Abroad Report



わたしは、2017年11月12日(日) — 16日(木)に韓国 Songdo Convensia Incheon (Airport City of Seoul)で開かれた国際学会「The 12th International Conference and 5th Asia Congress on Environmental Mutagens」に参加した。5日間にわたる国際学会では、合わせて473題の発表がおこなわれました。473題の内訳として、招待講演が136題、一般講演が90題、ポスター発表が247題でした。また、全世界29か国から700人以上の人が国際学会に参加していました。

そこでわたしは、2日目17-18:30の一般講演「Young Scientist Session」で、「Comparative error-free and error-prone translesion DNA synthesis of an intra-strand crosslink formed by cisplatin, in nucleotide excision repair-deficient XP cells lacking TLS polymerases.」という研究内容で10分間口頭発表をおこない、研究内容が認められ Young Scientist 賞を受賞しました。



そして国際学会に参加した翌日、11月17日(金)に東国大学の Young-Rok Seo 教授の研究室に訪問しました。

そこでは、Seo 教授の研究室の学生たちと共に合同セミナー「International Brainstorming about Gene & Environment」に参加しました。

合同セミナーでは Seo 教授の研究室の学生 Kim Hyun Soo と Jun Hyuek Yang の2人と当校からは河野とわたしの2人、合計4人が15分間口頭発表し研究内容について15分ディスカッションをおこないました。



■ Soo のテーマ「Integrative toxicogenomic analysis for understanding lead-induced genotoxicity with underlying signaling networks in response to low-level lead exposure in rat model」

■ Jun Hyuek Yang のテーマ「Network Analysis between *Daphnia magna* and Humans Using BLAST to Identify Biomarkers for Cadmium Exposure」

当研究室では、環境変異原に対しておこる突然変異を解析している。訪問先の Seo 研究室では、パソコンのソフトを用いて遺伝子間の相互関係を調べていた。環境変異原というテーマをもとに研究しているという共通点はあるが、それに対するアプローチの仕方が異なっていた。

そうした研究について発表を聞き、質疑応答では疑問点を質問し解消することができたので、有意義な時間となった。また、彼らの研究に対するアプローチを自分の研究ではどういう風にかすことができるか、ということを考える機会となった。わたしの研究では突然変異に関与する遺伝子をはたらかない細胞を用いて、それら遺伝子のはたらきを調べている。そこで、Seo 研究室でおこなっている各遺伝子間のネットワークを調べる研究方法を利用すれば、わたしが着目している遺伝子がほかの突然変異に関与する遺伝子とどのように相互関係をもっているか調べることができるかもしれない。このようにして、他大学の研究室に訪問しディスカッションすることで、あらたな知見をもつことができ、さらに自分の研究を進めていくことに繋がるはずだ。



合同セミナーのあと、一緒に食事をした。ここでは、研究内容だけでなく、普段の生活やお互いの文化について楽しく話すことができた。韓国と日本で国は違うけれど、おおむね理系の研究室で過ごす毎日は変わらないということがわかった。特におもしろかったことは、やはり言葉のことで、日本語では「あたし」「わたし」「おれ」「ぼく」という一人称についての言葉が多いこと、それらの状況での使い分けや、映画「君の名は」はどのようにして「君の名前は」ではないのかということ、日本人と接していると考えないようなことだったので、彼らの発想に触れることができ大変刺激的でした。

そこで、日本の作家を好きな学生がいて意気投合し、いままでに読んだ好きな本を話した。しかしそのとき、英語で自分の伝えたいことを伝えることができないという歯がゆい思いをした。このような「自分の思っていることを英語で伝えることができたなら…」という思いを忘れずに、日ごろから英語学習に取り組みたい。